

「これからの学びを実現する生駒南小・中学校の施設整備を考える会議」

第1回会議 会議録(要旨)

開催日時 令和5年8月8日(火) 午後2時から午後4時25分

開催場所 生駒南小学校 第2多目的室

出席者

(参加者) 松尾正則、西澤十三夫、田中康博、根來健夫、奥村宜夫、辻本得延、
日高容子、三浦美樹、谷口庸子、小金澤貫一、後藤香里、小出弘美、
大久保智子、眞井英司、奥田隆史、辻本宣之、乾正哉、田村佳啓

(アドバイザー) 横山俊祐名誉教授

(事務局) 原井教育長、鍬田教育こども部長、山本教育総務課長、花山教育指導
課長、日高教育指導課教育政策室長、三室教育指導課教育政策室主
幹、松田教育指導課教育政策室主幹、杉山教育指導課教育政策室主
査、佐竹教育総務課庶務係長

(傍聴者) 5名

欠席者 藤原由貴、武村篤人

○開会宣告

○教育長挨拶

この会議を発足するにあたり、会議への参加を引き受けていただき、ありがとうございます。昨年度、南小・中学校の今後を考える会議を開催し、多くのご意見をいただきました。そのご意見を参考に、教育委員会として、総合教育会議を経て、教育の方向性、施設の方向性、校区の方向性と、一定の方向性を決めさせていただきました。今年度からは、いよいよこの南小・中学校において、どのような学校をつくっていくのかということを皆さんと共に考える「これからの学びを実現する生駒南小・中学校の施設整備を考える会議」を開催します。この会議では、これからの学びとは何か、それを実現する施設整備とはどのようなものなのか、まずそこから皆さんと共に勉強し、情報共有しながら進めていきたいと考えております。本日は、第1回目ということで、大阪市立大学の名誉教授である横山俊祐先生に座長として来ていただき、小中一貫校の計画や建築から見た特徴・有意性を考えるということでお話をいただきます。

子どもたちがこんな学校で勉強したいという学校、保護者の皆様にとっては安心して子どもを登校させられる学校、地域の皆様方にとっても学びの場所、交流の場所となる学校、生駒市にとって新たな一歩となる、そのような学校を皆さんと共につくっていただけることをわくわくしております。思いや夢を語りながら、今年度は基本構想として、つくり上げていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局より配布資料確認

【資料1】これまでの経緯

【資料2】開催要綱

【資料3】参加者名簿

【資料4】横山先生ご経歴

【資料5】小中一貫校の計画～建築からみた特徴・有意性を考える～

【資料6】現在の南小中の敷地について

【資料7】今後の予定について

○会議の内容

1 これまでの経緯及び会議の趣旨について、事務局から【資料1】【資料2】を説明

2 会議の参加者について、自己紹介【資料3】

3 事務局から座長の紹介【資料4】

○横山先生挨拶

横山でございます。学校建築に関わり始めたのは、もうずいぶん古く1980年ぐらいで、その頃とにかく詰め込み教育、受験戦争と過激な時代で、それに対して、子ども一人一人の個性や能力は全員違うわけですから、そこをきちんと見て、伸ばしていこう。そのためには、教育の中身だけではなくて、学校建築そのもの、建物も変わらなくてはいけない。その当時、教室だけが学びの場となっていました。学校というのは、学校全体がもっと学びの場にならなくてはいけない。それから、授業のやり方も、先生が前に立って、黒板に向かって説明をして、子どもたちに知識を伝えていく一斉形式だけではなくて、子どもたち同士で話し合いをする、あるいは自分たちで資料を見ながら調べていくという、様々な授業のやり方があるのではないかと。そういうことを考えていくと、学校の建物自体も、もっといろんな場所がなくてはいけないということで、当時、オープンスペース

という多目的に使える場所を教室の周りにつくっていき、それによって一斉形式以外にも様々な活動ができるようにと、学校の研究を始めました。今では、教室の周りに多目的に使えるスペースを持っている学校は、ずいぶん増えてきました。そういう流れに対して、最近では、学習指導要領の改訂、GIGA スクール構想によって、子どもたちに ICT 教育を充実させるというだけではなく、学び方そのものも変えていこうと、主体的、対話的深い学びから、今は協働的な学び、対話的に学んでいこう、調べ学習を中心にやっていこうとなっています。それから、今日も、コミュニティ・スクールの関係で学校運営協議会の方々もご参加いただいているということですが、地域も学校に入り込んでいただいて、子どもたちと一緒に育てていく。かつては、学校施設を地域の方がどう使うかという学校開放ということが、学校と地域の繋がりだったのですが、今日では更に進んで、地域と学校が一緒になって、子どもたちをどう育てていくのかということを考えていく時代になってきております。そういう中で学校も、先生方が一生懸命教えれば、建物はこれでいいということではなくて、施設も変わっていかないと、先生方の理想的な教え方には対応できないわけです。

小中一貫校というのは、まさに、これからの新しい時代の学校教育に対して、もう一つ新しい可能性のある学校をつくっていくことです。かつては、中1ギャップをどのように解決していくかというために一貫校が考えられ、これが一貫校のスタートだったのですが、今は、もちろん考えなくてはいけないことですが、それを踏まえた上で、どのような新しい可能性のある学び方ができるのかを、一貫教育の中あるいは一貫の校舎の中で考えていこうということが、本流になってきています。

これから 3 回の会議ですが、この南小学校、中学校を一貫校にして、どのような夢のある、子どもたちが生き生きと楽しんでくれるような学校にできるのかということについて議論していただけたらと思います。子どもたちの未来をここに託すという意味で、学校をつくることはとても楽しいことです。皆さん、是非楽しみながら、それで自由にご発言をいただいて、この会議を有意義なものにできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

〔座長、横山先生の進行〕

4 小中一貫校の計画～建築からみた特徴・有意性を考える～について、【資料5】を基に横山先生による説明

日本全体を見たときに小中一貫校のつくられ方、いわゆる建築的な側面から小中一貫校というのはどういう特徴があるのか、どういう優位性があるのかということについて紹

介をして、小中一貫校とはどんなものなのか、どのような可能性があるのかということをご理解いただければと思う。

●スライド2

当初の課題は、中学校の問題にあった。これはI市の平成20年度と平成21年度入学の子どもたちの不登校の数を示したものである。学年が上がっていくにつれて、小6から中1に上がった途端に、6人から21人、5人から27人と増えた。このように不登校が増える要因として、下に示す学力のグラフから、小学校のときは一定の学力が保たれているが、中学校になると学力が下がっていくという問題があった。

●スライド3、4

同様にこれは全国の統計数だが、やはり中1でいじめの件数と不登校の児童・生徒数が突然増えている。これには、環境が大きく変わることによる原因があるのではないかと。例えば、小学校のときは小さな学校に通っていたのに、いくつかの小学校が一緒になった中学校に通うことになるし、英語や数学等の新しい教科が始まり、先生も小学校のときは学級担任ということで1人の先生との関わりが強かったが、中学校になると教科担任となり、様々な先生が1人の子どもに対応するという変化もある。受験に関わる学習成績の重視の問題もある。友達も近所の同じエリアの子どもたちだったのが、中学生になって日常の生活圏が広がっていくことで付き合いが変わっていく。それから、生徒指導が重視される、思春期への移行等々がある。

こういう環境や心身の変化に対応しきれない様々な問題が起きてきていて、環境が劇的に変わることをもう少し穏やかな変化に変えられないかということから、小中一貫校の取組が始まった。中1ギャップをどうにか解消しようというので、例えば、小学校と中学校の連続性を高めていこうと、小学校6年、中学校3年の制度の中で、子どもたちの教育の仕方を4年と3年と2年で分けるとか、5年と2年と2年で分けるというように、小6と中1をどのように連続的にしていくのかと、様々なやり方を工夫した学校が出てきている。小中一貫校では、6年+3年という形を、9年間を一貫して、計画的、系統的、体系的に1人の子どもに対して、教科指導もできるし、生活も見ることがができる。それから、様々な子どもたちがいる中で、異なる学年の交流によって、つながりができていくこともある。

もう一つ大きいことは、先生方の意識が変わることである。小学校の先生は中学校のことはあまりご存知ないし、中学校の先生は小学校のことはあまりご存知ない。それぞれが、先程の中1ギャップの問題にもつながってくるが、一貫校にすることで先生同士がお互いに理解を深めることができる。これは非常に重要なところである。例えば、小学1年生から中学3年生まで学習を連続的に見ていくことや、小学校は、クラスに担任

の先生がいるので、1つのクラスは1人の担任でしか教えられないが、それを、中学校の先生や、いろいろな専科の先生を入れることによって、1つの学習集団を複数の先生で見ることができるといえる。また、少人数にも、縦割り集団もできる。地域との関係性も、6年間で1回切れて、中学校で、また新しく編成されるが、一貫校は9年間を通して、学校と地域の関わりが継続できる。学校と地域との関係が長期的になり、非常に安定的になる。

●スライド5

小中一貫校は、制度によって分けられ、1つは義務教育学校である。これは、純粋に丸々1つの学校で、小学校とか中学校とも言わない9年間の学校になる。運営の仕方は、小中一貫校とそんなに違わないが、組織の問題として、先生方のつながりや、免許の問題が通常の一貫校よりも、やや連携が強まっていくということが挙げられる。次に、小中一貫校では、併設型と連携型があり、連携型というのは、例えば隣町の小学校と本町の中学校が一緒になって一貫校をつくる等、設置主体が別の場合となり、数としては多くない。今は、真ん中の小中併設型の学校が一般的である。それから、それが進んだ義務教育学校も増えている。

●スライド6

福山市立鞆の浦学園という一貫校を紹介する。

左は、運動会後の感想で「ぼくのがこがれの人、りょうがくんです。」とある。これは、運動会を小中学校で一緒に行き、小学校低学年の羽田くんは、中学生のりょうがくんが、とてもかっこよかったということを感じて書いている。下は、8年生の生徒（中2）が、7年生のみんな（中1）が一生懸命やってくれてありがとうとお礼を伝えているもの。こういうように、年齢を超えていろいろなつながりができてくる。

右のボックスに書いてあるように、中学校への進学に関わる不安が緩和する、問題行動が減少する、お互いの思いやりが出てくる。それから、小さい子は、上の子を見て、あんなふうになりたいという憧れの気持ちが出てくるようなこともある。学習意欲も向上し、教員間の協力意識や異年齢の幅の拡張により、活動、体験の多様化も図ることができる。

●スライド7

学習面について。左から2つ目のGk小・中学校の欄で、赤で囲っているのは5、6年生の授業科目の国語・算数・理科・社会・音楽・外国語活動の横に中→小となっているが、これは小学校に中学校の先生が教えに行くケースを示している。例えば、小学校でも理科や音楽の専門の先生が授業をすることがあるが、一貫校になると、そういう専科の先生だけではなくて、中学校の先生はある意味全員専科の先生となり、理科専門・国語専門・社会専門それぞれの科目の専門の先生がいて、その先生が小学校に教えに行

く。それによって専門性の高い授業をやっている。隣の Fm 学園の欄は、逆に小学校の先生が中学校に教えに行っている。単独と書いてあるのは、まるまる小学校の先生が授業をやっているということで、TT と書いてあるのはチーム・ティーチングのことで、ある学習集団や、クラス単位に、小学校の先生と中学校の先生が一緒に入って、2 人以上で授業をするということである。その右側の Oh 学院は、小学 1～4 年生に中学校の先生が入って、チーム・ティーチングを行っている。

このように、小学校は学級担任が教える、中学校は、教科担任が教えるという枠を超えて、きめ細やかな教え方ができるようになってきている。

●スライド8

教師の相互乗り入れの具体的な場面の様子である。

中学校の音楽の先生がピアノを弾いている。その下は、子ども5人に対して小学校と中学校の先生が3人。右上は少人数教育で、1つのクラスをいくつかに分けて授業を行っている。右下は学力テストの結果を示したもの。このように学習面での様々な取組が可能となる。それによって子どもたちの学習意欲も上がることを示している。

●スライド9、10

学校独自の取り組みを示したものである。

全校生徒 9 学年全員で取り組む運動会のようなものは、1 に入っている。2 は、小学校のある学年と中学校のある学年が一緒に活動するものになる。今まで小学校だけでやっていた活動に中学生が入ることによって、内容を高度化、多様化していくことがあり得る。一貫校になると、教育課程の特例校制度というのがあり、学習指導要領はきちんとやった上で、加えてその学校で独自の教科を用意して展開をすることができる。英語教育を早い段階から導入することもできるし、社会に開かれた教育課程という独自の教育プログラムをつくることもでき、それらを組み合わせることによって、今までにない授業や科目が用意できることもある。また、5、6 年生の授業時間は、一般的に 45 分授業だが、中学校の授業時間の 50 分授業にしようという学校も出てきている。

●スライド11

一貫校の成果（文科省の統計）を示したものである。

「成果が認められる」が 76%、「大きな成果が認められる」が 20%、23%ということで、一貫校にして非常に効果が出てきていることが分かる。

●スライド12

時間割の調整のいくつかのパターンを示したものである。

一番上は、小学校と中学校の休み時間を変えることによって、授業の開始時間を全て

同じにしていくやり方。真ん中は、1時間目と3時間目と5時間目の開始を合わせるパターン。一番下は3時間目を合わせるパターン。このような時間割の工夫によって、小中の先生方の連携を高めていくことが可能となってくる。

●スライド13、14

一貫校の建物について紹介する。

これまでの学校建築（教室と廊下しかないような学校）から脱却をしていくことが考えられる。一貫校の特質は、小学校、中学校単独では得られない多様性である。中学生のお兄さんお姉さんがいる。中学校の先生もいる。それから地域の方も、中学校のPTAの方が小学校にも関わる。それから、先程申し上げたような縦割りの活動もあるし、学年を超えた組み合わせで活動することもあり、活動の多様化が可能になってくる。ヒトやモノやコトをつないでいくことによって、お互いに理解し合うことになり、意識も変わっていき、新しい活動や質の高い活動が出てくる。

時間性では、6年間では気づかなかったことに対して、9年間で気づくということがある。小学1年生と中学3年生は、全然違うということも、改めて認識できる。

これらから、年齢に応じて環境は考えていかななくてはいけないのではないかと。小学校も中学校も同じつくり方で良いのだろうか。発達段階によって徐々に変えていく必要があるのではないかと。また、6年+3年という長期的な学びを体系的にやっていくこともある。これらの特質をどう生かすのか、今問われているところである。

●スライド15

ここから建物の話になるが、一貫校の施設として、一体型、隣接型、分離型と3つある。一体型というのは、小学校と中学校が1つの建物にまとまっている。隣接型というのは、小学校と中学校っていう区分があって、隣同士の校舎を渡り廊下や建物でつないでいる。分離型というのは、小学校と中学校は別の敷地にあって、一貫教育をやっているというものである。

施設のつながり方によって、成果がどれくらいあるか、文科省が調べたデータになるが、1つの建物の中に小学校も中学校も一緒に入っている施設一体型が、「成果が大きくある」の割合が26%で一番高い。そういう意味で、一貫校をつくり、効果を発揮させるには、一体型である必要があるといえる。

●スライド16

一体型もいろいろある。図はすべて一体型だが、生駒北小中学校は、校舎の上下で、小学校と中学校が分かれているタイプで、上から2つ目になる。

望ましいのは、建物は一緒でも、小学校と中学校が別々に分けられているのではな

くて、一番上の完全一体型をつくっていくことが必要ではないかと思う。

●スライド17

先程申し上げた小6と中1を連続化していくということで、右下の教室の配置をご覧くださいとわかるが、5年6年7年で並びの教室配置になっている。とにかく小6と中1をつなごうというのが1つの流れになっている。

●スライド18

9年間という発達段階の違いに応じて、教室の周りの計画を変えていこうというものである。実際に結構でき始めている。小学校の低学年の場合には、特別教室に頻繁に行き来したりはないので、自分たちの教室周りで様々な活動ができるようにと考えてつくっている。3～6年になると、様々な活動が出てくるし、教科学習も重要になってくる。そういう多様な学習、学び方に対応できるように、教室の周りに多目的に使える場所、そこに学習教材を用意したり、活動の場を用意したりということを考えて配置する。中学校になっていくと、教科教室型となり、教科学習を充実させていくようなつくり方をしている事例である。

●スライド19

低学年の教室のつくりの一つの例である。ご覧のように教室がすごく大きい。よくある小学校は大体60数㎡だが、100㎡の教室を持った学校もできている。教室を大きくすることによって、教室の中に、水回りや図書コーナーができたり、グループで打ち合わせができるようなテーブルを置くことができる。

●スライド20、21

CRは教室、OSは多目的に使える場所で、中高学年になると、教室の周りに多目的のスペースがあり、ここで様々な活動ができる。教材もここに置いておけるように計画されている。ランドセル棚も手洗いも、教室と教室の間にまとめて配置している。

今の教室は、机があって、後ろに荷物が入りきれないぐらいに置いてあり、子どもの作品が展示してあったり、資料があったりして、教室にいろいろなものが全部入り込んでいて、雑然としているが、そういうことを整理していこうという考え方で計画されている。

●スライド22

まだ実践例は少ないが、中学校になると、こういう可能性があるということでご紹介したい。教科教室型という、国語も社会も数学も英語も全て専用の教室を持っている。例えば、数学なら、専用の教室の周りに、数学に関する教材が用意されて、非常に専門性の高い空間、学習環境がつけられるというメリットがある運営の仕方である。

●スライド23、24

同じ学校の社会の教室だが、右と左の写真では机が違う。座学で学習するときは左側で、グループで作業するときには、右の教室を使う。更に、社会の教室の周りには、社会に関する資料や図書、パソコンがあり、社会を学ぶために最適な環境が用意してある。全ての教科に渡って、このようなつくり方をしている。

下は理科の様子だが、顕微鏡や望遠鏡等、普段は準備室に仕舞い込まれていて、授業のときだけ出してくるものを、このように多目的スペースに出していることによって、子どもたちはいつでも自由に使える。これが学びのきっかけになったり、興味を深めていくことにつながる。

●スライド25、26

次がまた一貫校の面白いところで、小学校と中学校をつくると、小学校の理科室と中学校の理科室というように似たような教室を2つ作る。音楽室も同じである。だが、一貫校なので、小学校、中学校の音楽室を同じようにつくるのではなくて、一つは音楽ホールにして、演奏や歌を歌うなどの活動をするときは、写真の右側にあるような伸びやかな空間の中で活動ができる。一方、座学で学ぶときや音楽鑑賞には、写真の左側です。このように、音楽室を機能の違う2つのものを持つことによって、活動内容に応じて、戦略的で活用していくことができ、非常に質の高い学びの環境となっていく。

理科室も、小学校、中学校で同じようなものを2つ作るのではなく、実験室と講義室を用意する。最初に先生が説明をし、それから子どもたちが実験をして、成果をまとめて最後に発表するという授業をする時に、実験台では先生の話の話を聞くときや自分で調べてまとめたりするときにはやりにくいので、そういうときは真ん中にある座学のスペースを活用することによって対応できる。

●スライド27

体育館も、小学校用、中学校用と面積の違うものを2つ用意するパターンもあるが、ここで示しているものは、大アリーナ、中アリーナ、小アリーナを3つつくった学校の例である。小アリーナは、今机が置いてあるが、活動内容に応じて、広さを使い分けることができる。

●スライド28

先程、申し上げたように一貫校の特質として、お互いの関係性をつくるのが大切で、教室をなるべく開放的につくっていく。写真はドラムが見えているが、小学生が前を通るときに、中学生はこんなことをやっているのかということが見える。作品も、低学年から高学年までを配列することができ、いつでも目に触れることが可能になってくる。

●スライド29、30

この学校では、真ん中の吹き抜けを介して、いろいろな視線のやり取りができるように

なっており、お互いに交流できるようなつくり方をしている。階段を下りる途中に、他の学年が見えるように、あえてガラス張りにしている。このガラスは、防火用なのですごく高いが、このように空間を開くことで、異学年の交流や関係性をつくる。

●スライド31、32、33、34

共有空間は、計画的、偶発的な出会いの拠点にもなる。右上の写真は、階段で、様々なイベントに使えるような場所、右下の写真は、発表会等の様々な活動が展開できるような広いホールが用意されている。

図書スペースも、鍵がかかっていて休み時間だけ開くような図書室ではなく、学校の中心にオープンにつくられていて、いつでも入れ、いつでも本が読めるつくり方になっている。低学年と高学年で図書のスペースを変える、配置している本の種類も変えることもできる。図書とコンピュータを組み合わせたような活動についても、今後考えていく必要がある。

●スライド35、36

家具について。右側の写真をご覧くださいと小学生と中学生は、こんなに体格差、身長差がある。その差に対して、いくつかやり方があり、左上の写真は、小学生用の少し小さい家具と、大きめの家具を一緒に置いておく。また、高さが調整できるように、可動式にするというやり方もある。

いくつか調べた結果、中学生向けの少し大きめの家具を用意して、それを低学年でも使うことが一般的なようである。

●スライド37、38

職員室も、今は島になっていて、学年順に並んでいるが、一貫校の場合でも、小学校の先生方のエリアと中学校の先生方のエリアで、分かれていたりする。固定席になっていて、自分の机は決まっている。それに対して、フリーアドレスといって、自分専用の机ではなく、作業内容や気分によっても、場所を選べる。このフリーアドレスを本格的につくっていくと、例えば、小学校と中学校の先生が隣同士に偶然座って、相談するというのも可能になってくるし、小学校と中学校の先生と一緒に話をするというのも簡単にできる。小中のつながりを良くしていくという意味でも、作業内容に応じて場所が変えられるということは非常に効率化につながるので、フリーアドレスは、これから広がっていくのではないかと思う。右下は、福岡の博多小学校の先生方の休憩スペースで、地域の方が学校にやってきて、先生方にコーヒーをサービスしてくれるカフェとなっている。

●スライド39

写真のように、職員室もこれから変わっていく。子どもたちと先生方のつながりを良くし

ていくために、職員室を開放的につくった例である。それから、先生方の居場所を分散していき、いろんな場所に先生方の居場所を用意していくことによって、児童生徒とのつながりを良くしていくこともできる。

●スライド40

今まで話してきたことのまとめとしてご覧いただければ。

小学校と中学校が一貫校になって、1+1が2になるのではない。1+1はやはり3にも、4にも、5にもしていかななくてはいけない。ここが非常に重要で、単独ではできないことが2つ合わさって、できることはたくさんあると思う。それを考えていくことが重要になってくる。それから、一貫校をつくったから、何でも良くなるということではない。一貫校というのはあくまでも手段であり、一貫校をどう生かすかということが、重要である。そして、生かすために、やはり良い建物と良いプログラムを考えておく必要がある。

コミュニティ・スクールの構築

●スライド41、42

9年間という長い期間、学校と地域がつながるとい特徴をどのように生かしていくか、コミュニティ・スクール構想、学校運営協議会、地域学校協働本部、社会に開かれた教育課程という、コミュニティ・スクールの三本柱と言われているものの説明となる。

●スライド43、44

守口市の義務教育学校さつき学園の取組事例である。「地域とともにある学校」をつくっていく目標の下で、学校運営協議会の下部組織として、学習支援部会、生活部会、文化・スポーツ部会、広報部会という4つの部会があり、学校と地域連携の活動にがんばっている。

建築的には、左側の配置図の青で囲った部分が、地域活動の拠点がある。入口は、オートロックをかけて、セキュリティチェックをやっているのので、不審者が入れないようになっている。ここから地域の人が入ってきて、様々な活動を展開している。

これまでも、学校に地域の人に来るといのは、グラウンドや体育館、特別教室を使うことが一般的にあったが、これからはコミュニティ・スクールを前提に、学校に地域の人が様々な活動を支援に行くことが想定される。一緒に活動を楽しむことを考え、そのためにはこのような拠点が必要になってくる。

●スライド45、46

地域の方が、実際には授業にも参加している。習字の指導など授業に直接関わるものや、図書ボランティア、下校見守り等、子どもたちの日常の安全を支えるような活動も

展開されている。

学習支援の例として、家庭科の裁縫を、地域の方が教えにくる。それから、右上は、技術の時間にはんだごての指導を地域の方がやっている。このような学校と地域が連携する活動は、今後ますます活発になってくると思うので、それに対する学校のつくり方も考えておかななくてはならない。

●スライド49

クラブ活動も地域の方が、指導者となる。右側の写真は、博多小学校で日本舞踊を50年間教えている方で、子どもたちからありがたいのメダルをもらっていた。50年はすごいと思うし、地域にはそういう継続性がある。

●スライド51、52

企業も学校で教えたいところが結構ある。ここに一部を載せている。コンピュータの会社が、この学校と連携をしており、最近流行りのプログラミング学習や、レゴブロックの指導や教材提供をすることもやっている。

●スライド53

写真のように地域の方と一緒に給食を食べたり、地域の高齢者と一緒に活動することも挙げられる。今まで学校と地域という関係は、学校施設を地域が使う状況から、学校と地域が一緒になって活動することに变化してきている状況である。

●スライド56

学校のつくり方もだいぶ変わってきていて、日中でも、学校の真ん中を地域の方が横断できるような計画もあり、このハスの葉モールの両側に、地域の方が立ち寄ることができる地域ラウンジやカフェ、地域連携協働室があり、地域の方が学校にどんどん入ってくる。

●スライド57、58

守口市の小学校の例だが、まちなかガーデンという中庭の周りの青色で塗った部分が、地域の方が入れるまちなかサロンという場所がある。また、左上の写真は、郷土資料室を全て地域の方がつくった。こういうことをするためには、計画の段階で、ワークショップ等に地域の方たちの参加があり、いろいろな意見を出していく。ワークショップでは、学校をつくるためだけではなくて、その後の学校運営にまでつなげて考えていく必要がある。

●スライド61

まとめになるが、地域と学校が連携し、協働的な活動をすることによって、学校活動はすごく豊かになる。学校の先生も、負担軽減されるのではないか。地域の豊かさも、そういう学校にみんなが関わることで高まっていく状況がある。

●スライド62

一貫校をつくって、評判が良かった2校の事例紹介だが、1つは、京都の御所南（ごしよみなみ）小学校。ここは、NHK が学力調査でトップと放送し、それを基に、減っていた人口が増えて、御所南小学校だけでは入らなくなり、新しく御所東小学校という学校を数年前につくった。それぐらい影響があった。

2つ目は、箕面市のとどろみの森である。写真ご覧いただくとわかるが、この段階では、造成だけでできていて、建物はまだあまりない。今車が止まっているところの右側に校舎が少し見えているが、ここに一貫校をつくったら、今この住宅地は全て建物が建って、人口が増えている。

このように、学校力を活かす地域づくりは、子どもたちのためにはもちろん、地域にとっても活性化をしていく上で、とても重要となってくる。

以上が資料5についての紹介となる。

<参加者からの意見・質問、フリー・ディスカッション>

- ・一貫校が良いと思うが、やるにはやはり、親が変わっていかないといけないと感じた。今の親の考え方では、小中一貫教育がなぜ良いのか分かっていないので、親が変わるのは大変。
- ・小学校と中学校、東側にはコミュニティセンターせせらぎ、北側には消防署があるので、これらをまとめた施設として、地域との関わりができれば、全国から視察に来ていただけるような注目される施設になると思う。
- ・小中一貫教育は、良い面と、悪い面がおそらくあると思うので、どういうところが問題、あるいは課題となっているのか解説いただきたい。小学校低学年と、中学3年生が一緒に学ぶのは、あまりにも離れている。おそらく低学年が懂れるのは、5、6年生ぐらいの子どもたちで、5、6年生の果たす役割も大きいのではないかと。一貫教育というのは、これから試みられることで、これについては未来を向いていかないといけないと思うが、まだわからない面がある。
- ・一貫教育と、校舎をどうするかということは別の問題。施設一体型といっても、校舎を離れた形で、それを繋ぐ考え方もあるのではないかと。低学年には、大きな広々とした建物空間は、大き過ぎると感じるかもしれないので、配置については考える必要があると思う。体育施設、運動施設、あるいは校庭について、言及が少なかったが、敷地全体として、どう配置するか、体育館に大中小と設けるのは良い。グラウンドについても同じように考

えて欲しい。児童生徒の安全を考えたときに、正門の位置は、考えないといけない。せせらぎの方に、正門がある方が良いのではないか。それから南小学校は避難所に指定されているが、車で入ることができない。

⇒横山先生：問題についてはあまり把握しておらず、ただ義務教育学校の校長先生の「課題はあるが問題はない。」という印象深い言葉があって、解決しなくてはいけない課題はあるが、それは解決できないことではない。そういう意味で、問題としてどうしようもないことはないとおっしゃっていた。それが一貫校をやっている全ての学校に当てはまるとは思わないが、そういうお話がある。

低学年と高学年の関係も、最近いくつかの学校で、1年生の隣に6年生の教室配置する学校が出てきている。それは、1年生に対して6年生がいろいろと面倒を見る、興味を持ってくれること、低学年は6年生に対して憧れを持つことがあって、結構、1年生と6年生を隣り合わせにするのは良いことだとおっしゃっていて、私達が思っている、年齢順にきちんと並んでいなくてはいけないという考え方は少し変わってきているという気もする。

・思いやるといようなことを強調されているが、例えば、運動会を1年生から9年生まで一緒に開催するとなると、お互いに気遣い、優しさがなくなかなかできないことだと思う。それは年齢が離れた兄弟の面倒見ていたらわかると思う。ある程度近い学年同士で行う方が、より楽しく、有意義なものになると考える。

・夢弾む話で、こういう方向で取り組んでいきたいと思うが、この話を聞かれて、先生方はどう思われたのか。制度が変わる以上に先生が変わらないと、上手くこの施設が生かせないのではないかと、という意味で、先生にもものすごく刺激を与える改革になるのではないかと。今、先生方にそれだけ体力があるのか。そういうことも含めて考えないと、建物は素晴らしくなったが、中でやっていることはあまり以前と変わらないということにも、なりかねない。

⇒横山先生：今のご意見を受けて、先生方の話も少しお聞きしたいと思うが、いかがか。

・今までの経験から考えてしまうことも多いが、新しい校舎の素晴らしさについての新しい視点をいただけたと思っている。個人的には、今外国語の授業を持っていて、中学校の授業参観や小学校と中学校の会議にも出席させていただいている。小学校と中学校との物理的な距離が縮まれば、今中学校でこんなことをやっているのだと分かるので、メリットが大きい。

・このような新しい施設が実現すれば、特に、教員自身がやりたいことを実現するための設備や器具が充実していくので、今までストレスになっていたことが軽減し、かなり働き

やすい環境になるのかと思う。

- ・休み時間に生徒指導上の問題ができるだけ起こらないように、廊下に出て、子どもたちとコミュニケーションを取りながら、子どもたちだけの時間ができるだけないようにと、普段から意識してやっている。自由に行き来できるエリアや自由に過ごせるような空間は大事だと思う反面、どこまで大人が干渉して良いのか、また、多少仕事の量が増えたりとかもあるのかなとマイナスのところも、想像していた。
- ・学校では、学習指導要領がどんどん変わっていき、教える内容も、教え方も 10 年 20 年前とは大きく変わってきている。先生方は、今の時代の授業の仕方には、50 年前の古い校舎の中では、使いにくいと思いながらも、自分たちで工夫をしながらできることを、とても一生懸命考えてやっていただいている。それが今の時代に合った教育を進めていくために使いやすいものになっていくのであれば、もっと先生たちも働きやすくなるだろうし、教育効果も上がっていくのではないかと想像すると、すごくワクワクする。
- ・考えが古い、昔の教えてきたやり方をずっと持っている者もいるのも確かで、全体として、いろんなことを勉強しながら新しい時代に合わせたものにバージョンアップしていかないといけないということは、仕事をしていく中では必要なことなのかなと思っているので、できないではなくて、みんなで頑張ろうという方向で、みんなで力を合わせてやっていると、きっと素晴らしい学校になるだろうし、地域の方にもたくさん力を貸してもらえ、すごく素敵な学校ができるのではないかなと思う。
- ・学校が子どもの数が減ってきて、空き教室がいっぱいある。空き教室に名前をつけて、様々なことに使っている。学校運営協議会、コミュニティ・スクールがスタートして、ボランティアルームという名前の部屋を新しくつくった。ボランティアの方々に、何も用事がないときにも来ていただいて自由に使ってもらって構わないという感じでスタートしたが、実際にはそういう使い方ができず、来校された時にそこで待っていただくような使い方しかできていないが、これから先のことを考えたら、もっとみんなに入ってもらいやすく、使いやすいものにしていく努力を、もう少し頑張っていていかないといけない、つくったものの、使えていないということを反省しながら聞かせていただいていた。
- ・王寺北義務教育学校に、たまに寄せていただくが、やはり環境が非常に良いと思う。義務教育学校なので、学年割がされているが、6 年生は、修学旅行に広島に行くような話もあって、大事な行事は、やはり学校単位で決めてから行ってって、子どもたちのより良い成長を考えてやっていただいているというところが見えている。
- ・ハードが良くなることは、ある意味先生方にとって、非常に使いやすく、便利になっていく、今の教育にあった学習ができることに繋がっていくので、新しいものを覚える作業が必

要だが、基本的に学習指導要領で決められた内容を教えていくことは変わらないので、それほど教師にとって負担になるということはないのかと思う。

- ・今までも話に出ているように、地域の方の力も必要で、小学校と中学校が上手く連携して、施設の的にも、組織的にも体制的にも、力を合わせていくことは、必要不可欠であると思うので、協力がなされることによって職員の負担も減っていくってことに繋がっていくと思う。そこを大事に考えていく体制もしくは施設をしっかり考えていけたら良いのかと感じた。
- ・新しい施設で学ぶことができる子どもたちは幸せだろうなとすごくイメージできた。また、こういう環境で仕事できる先生方も幸せにきつとなるだろうということイメージしながら聞かせていただいた。1日も早い実現を待ちたいと思う。
- ・前任が北小中学校で勤務をしていたので、それと照らし合わせながら聞かせてもらっていて、心配事が出ておられたと思うが、現場は大丈夫だというのが実感である。ただ、先生方の考えを変えないと、この夢の話は実現しないだろうと思う。
- ・先生方の負担は、切り替えさえできれば、そんなになんかと思う。むしろ楽だと思う。連携するのも施設が一緒だし、近くにいろいろな小学校の先生や小学校の児童、中学校の生徒、中学校の先生もおられるので、非常に良いと思う。先生がどれだけ変われるか、それを、この地域の皆さんが夢を持って支えていただけるかで、ずいぶん変わるのではないかなと思う。

⇒横山先生：先生方以外の方々からも追加の意見はあるか。

- ・昨年、2つの学校を見学させていただいたが、共有スペース、図書室を皆さんが使えるところに配置しているという意味が、今ようやく分かった。2つの施設とも、先生がおっしゃっているような理念は、叶えている施設だと思って聞かせていただいた。
- ・先程、PTA なり、大人が変わらないといけないと話があったが、先生も嫌だと思っていた。実際経験された先生がそんなに負担が多くないとおっしゃっているので、非常に頼もしく聞いた。
- ・この学校が、避難所という機能も持っていて、地域にとっても大事な拠点となってくるので、地域も、学校のあり方や関わり方、どのように協力していくのか、受け入れる体制について、住民も変わっていかないといけない、みんなが変わっていかないと感じていて、そういう場所になっていってくれたら嬉しい。
- ・エリア的に高齢化が進んでいる地域なので、ボランティアや高齢者の方が集える場所の機能も担っていただけると、皆さんが集まる地域になるのかなと思う。
- ・具体的にだんだんこの学校施設の建替えが近づいてきているのだと、一保護者として

思う。こういうところでこれから幼稚園から上がった小さなお子さんと、お兄さんお姉さんが一緒になって、楽しく学校生活が送れることが想像できた。

・早く、一貫校を実現させてほしいと思う。それで、中1ギャップの話があったが、その解消について、先生はどのようにお考えか。

⇒横山先生：小学校での生活や学び方と中学校での生活や学び方は、劇的に変わるので、それを緩やかに変化していくというように、環境を変えていくことが最大の方法ではないかと思っている。そのためには、先程申し上げた中で言うと、小学校のときから、中学校になったらこういうことをするとか、こんな学び方するのだということが理解できている。それから、この先生、中学校の先生なのに小学校のときに習ったという経験等が、環境の変化を緩やかにしていくための様々な工夫となり、問題解決の大きな要因になっていくのではないかと思う。

・南保育園が子ども園になり、保育園と幼稚園が一体化して、また老人施設も一緒だったので、運動会もお年寄りの方たちとその施設の方たちと一緒に遊ぶということですごく楽しかった。小中一貫とは少し違うが、小学校は6年生と1年生が交流できたりするが、中学生になったら、いきなり先輩、後輩となって、先輩怖い、厳しいという感覚もある。そういうことも、なくなるのか、中1ギャップも緩まるのかと思うと、すごく楽しみである。

・中1ギャップとかいう話があるが、私自身は中1ギャップがない。私が通っていた頃は、南小学校と南中学校の校舎同士が隣同士で、距離がもっと近かった。生活自体が横から丸見えだった。

・学校に40年勤めていたので、昔の教育のまま勤め終わって、やはり固定概念はある。学校に勤めていた人間でもそうなので、学校関係でない方にとっては、学校への固定概念はなかなか外れにくいと思うが、そこをぶち破って、いろんなことをやっていかないとしんどいと思う。

・先生方も、やはり多少不安はあると思う。ただ、不安はあったとしても、今のこの南小学校と南中学校の関係で一体型の校舎をつくるとしたら、別々に工事するのではなく、どちらか一方を取り壊して、工事の間の2、3年の間は、先生方同士の準備段階だと思う。いろいろ心配することはあるかと思うが、先程話のあった、小学校1年生と6年生が隣りの教室はとても良い。給食の世話とか、掃除を手伝いに行くのは6年で、意外と早く親しくなるということもある。そこを考えていくことが、またこれからの新しい教育に繋がっていくと思う。

・本当に夢のある話だと思うので、これが現実になると嬉しいし、きつくなると思うが、学校自体、校舎自体が長年変わっていないので、中の人間はあまり変わっていないというこ

とだから、大きな変わり目として、建物を変わり、形も変わり、基礎も変わらなければ、子どもは変わっていかないと思う。

- ・地域活動として、地域の人が一つのところにあつまって、待ち時間にたわいのない話をするが、それが目からウロコの話であったり、初めて聞く話があったりする。この時間が大事になっているので、もっと自由に学校に入り、どんどん友達になって、いろんな話をしたら良いといつも言っている。閉鎖的なのは昔からで、親が変わらないといけないのなら、学校も変わらないといけない、地域も変わらないといけない。もちろん、校舎も何もかも全て変わっていく、きっかけになるような事業だと思う。

5 現在の南小中の敷地について、事務局から【資料6】を説明

- ・中学校と小学校の敷地が高低差約3mある。この高低差をどのように活かしていくか。高低差を活かした校舎配置になる。
 - ・隣接する道路は、どこか。中学校北側の道路から、南小に接する国道308号線は広げることができるのか。敷地内に駐車場のことも考える必要がある。また、車が多く通るところを正門にはできない。
 - ・借地があるので、その取扱をどうするか。
 - ・市の保護樹林である杜さんの土地（共有名義）の取扱をどうするか。
 - ・南中学校の敷地内に、県の道路用地が残っている。
 - ・南小学校東側の擁壁が、かなり古いため、改修しないといけない可能性がある。
 - ・境界確定を進めているが、半分から3分の1、境界確認ができていない。
- ◎県に開発協議をかけていくが、土地を活用するところでの現状での課題があるため、時間がかかる可能性がある。

6 今後の予定について、事務局から【資料7】を説明

○閉会宣告